

日本イギリス哲学会関東部会 第91回研究例会

日時 2013年7月6日(土) 14:00~17:15

場所 東京大学本郷キャンパス法文二号館2階・哲学研究室

プログラム

14:00~15:30 (質疑応答を含む)

F・ベイコン『学問の進歩』『新オルガノン』における哲学観

伊野 連 (早稲田大学文学学術院非常勤講師)

15:45~17:15 (質疑応答を含む)

タイプとしての意味とハンプティ・ダンプティ理論

—ダメットによる議論の検討と再構成—

佐藤 暁 (東京大学研究員、駒澤大学非常勤講師)

関東部会担当

一ノ瀬正樹 (ichinose@l.u-tokyo.ac.jp)

山岡龍一 (yamaoka@ouj.ac.jp)

(◎を@にお直してください)

【会場案内】

本郷キャンパス法文2号館



最寄り駅	所要時間
本郷三丁目駅（地下鉄丸の内線）	徒歩 8 分
本郷三丁目駅（地下鉄大江戸線）	徒歩 6 分
湯島駅又は根津駅（地下鉄千代田線）	徒歩 8 分
東大前駅（地下鉄南北線）	徒歩 1 分
春日駅（地下鉄三田線）	徒歩 10 分

日本イギリス哲学会関東部会第91回例会報告要旨

2013年7月6日 東京大学本郷キャンパス

F・ベイコン『学問の進歩』『新オルガノン』における哲学観

伊野 連

ベイコン（1561-1626）は我が国の教科書等でも「近世思想の祖」と紹介されてはいるものの、その哲学的名著である『学問の新オルガノン』（*Novum Organum Scientiarum* 1620）はもちろんのこと、それに先立つ哲学的著作『学問の進歩』（*The Advancement of Learning* 1605）やそれを拡充の後に最晩年にラテン語化した『学問の尊厳と進歩』（*De Dignitate et augmentis Scientiarum* 1623）などが十分に顧みられる機会は少ないように思われる。一つには、ベイコンといえば「イドラ」（*Idola* 「幻像」）論や「イギリス経験論」「帰納法」などが連想されるものの、それに続くものがあまり浮かばないといったように、その一般的な理解に偏りがあることが挙げられるし、ベイコンの思想自体にも、後世のデカルトのような「近代的自我」の確立や「方法的懐疑」などのような明確な戦術が認められない、といった脆弱さがあることもさらなる理由の一つと指摘できるかもしれない。たしかに『新オルガノン』第2部の熱の性質をめぐる煩瑣な考察などは、はたして彼が近世哲学における革命者の名に値する人物であるか疑わしくさえ思える。

しかし周知のように、前代未聞ともいえる痛烈さでアリストテレスを批難することにより、ベイコンは確実に近世の到来の決定づけた。

さらにそれだけでなく、未完の「大革新」（*Instauratio magna*）構想を象徴する「オルガノン・プログラム」を掲げることで、学究精神が世代を超えて継承されることの重要性を訴えたベイコンは、後代のカントがその名著『純粋理性批判』の第2版大改訂に際し、当時ようやくドイツにおいて本格的に紹介されたばかりのその文言を「モットー」に引くこととなる。それはカント直後のフィヒテ『知識学への第二序論』（1797）によっても批判的に継承され、実にフッサール『「ブリタニカ」草稿』（1927）にまで及んでいるのである（「この学問〔現象学〕が使命とするのは、厳密に学問的な哲学のための原理的なオルガノンを提供することであり、また、この学問が一貫して繰り広げられていくなかで、諸学問すべての方法的改革を可能にすることである。」「それゆえ現象学は、現象学者が自分のために哲学的体系の理想を手に入れるという欲望を捨てるように、そしてなんといっても、他者との共同性において謙虚に働く者として久遠ノ哲学(*philosophia perennis*)のため生きるように要求するのである。」 Cf. *Husserliana Bd. IX* 1968)。

本発表は特に二つの哲学的名著をテキストとして、前掲したベイコンの主要なキーワードを踏まえつつも、哲学史を縦断的に捉えるにあたって彼のさらなる特質とも呼べるものを取りあげ、その意義について再考するよう努めるものである。

タイプとしての意味とハンプティ・ダンプティ理論

－ダメットによる議論の検討と再構成－

佐藤 暁

M. ダメットは、その著作『分析哲学の起源』の 6 章で、現象学者 E. フッサールの意味概念を、ハンプティ・ダンプティ理論（表現は話し手によって意味を結びつけられることで意味をもつという考え）であると批判した。本報告の目標は、従来あまり注意を払われることがなかったダメットのこの議論を解釈し、部分的に補うことで、タイプとしての意味概念からハンプティ・ダンプティ理論を導く、より徹底的で一般的な議論として再構成することである。

まず、ダメットがハンプティ・ダンプティ理論を批判しているとき、より具体的にはどのような考えを批判しているのかを明らかにする。たとえば、デイヴィッドソンがハンプティ・ダンプティ理論を批判するときには、話し手が、当の表現がもちうる複数の意味のうちから自由に選択することができる、という考えを批判している。しかしダメットはここで、そもそも表現が意味をもちうるということを話し手が決定できるという、より基本的な考えを批判していると解釈することができる。

そのうえでダメットは、フッサールのように意味をタイプの存在者と見なすことが、この意味で理解されたハンプティ・ダンプティ理論を含意してしまう、と主張している。そのことの根拠としてダメットは、トークンがタイプに説明の順序において優先される、という事実をあげている。しかしこれがなにを意味しているのかは、詳細に検討してみると、実はまったく自明ではないことが分かる。そこで本報告は、タイプとはそもそもなんであるかということまで遡って検討し、従来のタイプとトークンの二項図式ではなく、タイプとトークンとトークンの担い手という三項図式に変更するという一般的な議論を構築する。そしてそれによって、こうした「トークンの先行性」を整合的に解釈しうることを示す。最終的に、タイプとしての意味という観念から、このように理解された「トークンの先行性」を通じ、ダメットのいうようにハンプティ・ダンプティ理論を導くことができることを明らかにする。